
TALES OF QUARTET ~ バカと科学と妖怪と ~

かしす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T A L E S O F Q U A R T E T 〱バカと科学と妖怪と〱

【Nコード】

N O 7 6 0 Y

【作者名】

かしす

【あらすじ】

いつもの日常。

上条当麻は不幸と言う名の厄介事に巻き込まれながらも普通の生活を送っていた。

吉井明久は先生の雑用をこなし、バカな事件に巻き込まれてはいたが、普通の生活を送っていた。

奴良リクオは四国妖怪と対峙したり、学校の友人と妖怪探しに行ったり、いろいろ大変な日々を送っていた。

∴ 冬の気配も本格化してきたある日のこと。
異変は起こった。

文章力0 + g d g d 主の学園クロスオーバーストーリー

もし、執筆中気に入った作品があれば途中から入ってくるかもしれません

登場人物紹介（技などの紹介も兼ねることにします）

登場人物（主人公格3人）

上条当麻（とある魔術の禁書目録）

本編 第1問初出 外伝 第2問初出

学園都市のとある学校に通う高校二年生。

ある日、禁書目録と出会い、魔術と科学を巡る戦いに巻き込まれていった少年。

そんないつの日か、学園都市にある変化が訪れたことを知り、その原因を探る為調査を開始する。

特殊能力 『イマジンブレイカー幻想殺し』

戦闘方法 主に格闘家。精霊術は右手のおかげで使えない。

現在の習得技 『魔神拳』

装備 『素手』

吉井明久（バカとテストと召喚獣）

本編 第1問初出 外伝 第2問初出

学園都市の文月学園に通う高校二年生。
彼もいつも通りの生活を送っていた。

ある日学園都市の学生が急に精霊術が使えるようになる。
しかし、ほとんどの学生は精霊術を暴走させていた。

唯一暴走しなかった明久+いつものメンバーは事件の調査に乗り出す。

特殊能力 『鈍感』・・・毒や火傷、麻痺など状態異常にならない。
戦闘方法 魔法剣士、精霊術と剣技をバランス良く扱う。

超能力 『？』

現在の習得技 『魔神剣』 『瞬迅剣』

共鳴術技 明久+雄二 『魔神連牙斬』

装備 『折れた箒の柄』

奴良リクオ（ぬらりひよんの孫）

本編 第1問初出 外伝？ 初出

文月学園中等部に通う中学一年生。

明久とは昔からの知り合い。

リクオは妖怪と人間とのクォーターで闇に囲まれると妖怪に変化する。

ちなみにこれを明久は知っている。

学園都市の異常を妖怪として感じ取ったリクオは奴良組の妖怪とともに解決の糸口を探り出す。

特殊能力 『一刀両断』・・・敵の急所を即座に見極め、一刀両断

する。その代わりに自分の体力を削る。

戦闘方法 剣士、とある退魔刀と普通の刀を交互に使い、敵を翻弄する。

超能力 『？』

現在の習得技 『明鏡止水 桜』

共鳴術技 リクオ＋ローエン 『水氷牙・涼』

坂本雄二（バカとテストと召喚獣）

本編 第1問初出 外伝 第2問初出

Fクラス代表で幼いころ『神童』と呼ばれていた文月学園高校2年生。

戦闘方法 格闘家＋術者、時には敵に接近し、時には後方からの確に敵を精霊術で討つ。

超能力 『？』

現在の習得技 『魔神拳』

共鳴術技 雄二＋明久 『魔神連牙斬』

島田美波（バカとテストと召喚獣）

本編 第1問初出 外伝 第2問初出

ドイツからの帰国子女。文月学園高校2年生。

頭はそこそこに良いのだが、日本語がそれほど得意ではなくFクラスになってしまった。

得意教科は数学。

戦闘方法 騎士、素早い剣技と強力な精霊術で敵を殲滅する。だが、その強力さゆえに狙いはかなり大雑把。

超能力 『？』

現在の習得技 『魔神剣』 『穿孔破』 『ウインドカッター』

姫路瑞希（バカとテストと召喚獣）

本編 第1問初出 外伝 第2問初出

本当はAクラスに入るはずだった文月学園高校2年生。

今も明久に想いを寄せている。

美波とはいろいろな意味でいいライバル。

戦闘方法 僧侶、回復専門のお姫様（？）

超能力 『？』

現在の習得技 『ファーストエイド』 『リカバー』

木下秀吉（バカとテストと召喚獣）

本編 第1問初出 外伝 第2問初出

文月学園高校2年生。

本当は女の子では？という噂がでているほどの美“少年”

戦闘方法 狩人、弓を使つての戦闘を得意とする。

超能力 『？』

現在の習得技 『紅蓮』

外伝 召喚獣と爆炎の雨

榊原今宵

本編？ 初出 外伝 第1問初出

文月学園に通う高校2年生。

身長160センチくらいと小柄で偶に女子に間違えられることもあったが、Fクラスに来てからは本物がいたので勘違いされることはなくなった。

能力は『爆炎の雨』。レインザフレア 大能力者。レベル4

『置き去り』チャイルドエラー だったので闇の研究者拾われそのまま学園都市の暗部へと赴くこととなった。

榊原夜鈴

本編？ 初出 外伝 第1問初出

文月学園に通う高校2年生。

能力は『磁場調整』。マグネシエイク 大能力者。レベル4

今宵とは血の繋がっていない兄妹とともに『置き去り』チャイルドエラー だった。

その為、夜鈴も学園都市の暗部で活動している。

・本編と外伝の共通点について

1つはどちらのストーリーのキャラも同じ能力を保有しているという事です。

ですので、外伝で明久の能力を書いたとすれば、本編にも反映されるということです。

本編は主にテイルズ中心としたストーリー。

外伝は魔術と科学の対立などをバカテスとぬら孫のキャラで描いたストーリー。

となります。

その他、シリーズメンバーも多数登場します！！

登場人物紹介（技などの紹介も兼ねることにします）（後書き）

これからも宜しくお願いします!!!!

第1問 異変

精霊術。

人間は脳にある『ゲート霊力野』という器官から世界の根源『マナ』を生ずることができた。

その『マナ』を糧とし存在することができる精霊。

その見返りとして精霊は人間に代わり精霊術を発動させていた。

それはあくまで別の世界のお話。

とある世界は精霊術を必要としなかった。

その為、『ゲート霊力野』の発達はない。

それでは、その世界に急に精霊が現れたらどうなるのか？

異変は必ず何の前触れもなくやってくる。

いや、何もないというのは語弊かもしれない。

あることはあるが、普通の人間には分からないということか。

分かるとするならば………

a t 11月24日午後5時 第7学区

「――！？」

その少年は異変を掴み取った。

「とうまー！ご飯はまだかな？」

「まだ早いだろー！」

学園都市では、その異変の根幹は掴み取れなかったのかもしれない。

a t 文月学園 Fクラス

「ひ、姫路さん……？」

「私が勝つたら……女の子の格好をしてもらえますか？」

何でこんなことになってしまったんだろう……

a t 奴良組本家

「——!?」

「どうしたの？リクオ君？」

「いや…何でもないよ、カナちゃん」

「？」

この少年も気づいていた。

周りの妖怪達も例外ではなかった。

異変に気付いた時にはもう遅かったのかも知れない。

a t 11月25日午前8時 第7学区

「何だよ・・・？」

「どうなってるんだよ!!」

上条当麻は叫んだ。

ここは学園都市。

超能力の開発、無人飛行機など…

現代では絶対ありえないような、そんなことを意図も簡単に開発、実用化してしまうとんでも都市なのである。

だから、上条も電撃がそこらへんから飛んできたり、超電磁砲レールガンが物凄い音エネルギーや光エネルギー、運動エネルギーを伴って突撃してきたとしても驚いたりはしない。

……後者の方は間違ったら死ぬかもしれない。

本題に戻すと、上条がなぜ叫んでいるのか。

「ッ！大丈夫か！？」

上条は目の前で倒れた中学生くらいの少年に手を差し出す。

「あう……………（バタッ）」

少年が上条の手を掴む前にその場で気を失った。

「おいッ！！早く病院に……………！！」

上条は少年を抱えて走り出す。

とあるカエル顔の医者が勤める病院へと。

その異変は学園都市全域に拡大していた。

a t 文月学園 Fクラス

「ハアハア…… 雄二!!」

「ああ、俺達は大丈夫だ」

よ、良かった・・・

その異変は急に起きたんだ。

僕はその変化が起こった時、それに気づくことはできなかった。

だけど、もう遅いんだ・・・

「明久君……」

「姫路さん!! 無事だったんだね!!」

「はい……でもこれは……………」

変化。

何でこうなったのかも分からない変化。

昨日までいつも通りだった世界がいつの間にか僕達が知らない世界になってしまったみたいだった。

たぶん、学園都市の研究者達が見れば、目を輝かして僕らの脳を解

剖するだろう。

だってその変化は……

「アキッ！何で瑞希のことだけなのよっ！！」

そう言っつて美波が近づいてくる。

「ええ！？別にそんなわけじゃ……」

そこに秀吉とムツツリー二こと土屋康太。

「島田よ。今はそんなことを言っている場合ではないじゃろっ？その前に今の状況を整理すべきじゃ」

「……………緊急事態」

「そりゃ…………そうだけど…………」

美波…………そんなに心細かったのかな…………ごめんね美波。

「……………雄二…………！」

「翔子も無事だったか…………」

雄二は心なしか残念そうだけど。

「でも、雄二。今Fクラスにいるのは僕達だけ…………もうこの時間だからみんな登校してきてもいい時間だよね？」

「そう、だな」

雄二は窓から外を見る。

そこにあつたのは学園都市でも、あの天使みたいなのが現れた時よりも稀有な光景。

「能力の暴走・・・？」

a t 第7学区 奴良組本家

「つらら・・・これって・・・」

「はい・・・妖術とか、超能力とかの類ではないと思います」

リクオはその光景を見て、固まっていた。

つららと呼ばれた少女（本当は雪女という妖怪）はあくまで推測だ、というように続ける。

「これは・・・たぶん・・・この世のものではないと・・・思います」

「・・・！？ カナちゃん！！」

「リクオ様！？」

リクオは文月学園中等部へと走り出した。

異変。

それは超能力のような、魔術のような、でもちがう。

強いて言えば、RPGの呪文のようなものが学生の体から発生していた。

呪文は余波となって学園都市中に広がる。

ぶつかりあった術は空高く舞い上がりオーロラよろしくの光景を作り出していた。

力を完全に使い果たした学生は全員その場に崩れ落ちた。

上条 side

「ッ!？」

病院はほとんどその機能を果たしていなかった。

なぜなら、上条が抱えている少年と酷似した症状を訴えている学生でロビーが埋まっていたから。

ここでこれなら他でも同じなのだろう。

「あなたッ!？どうして動いてるんですか!？」

驚いた声を上げたのはこの看護師さんだろう。

「い、いや・・・こっちが訊きたいんだけど・・・」

「！ 早く先生のところに！！」

刹那。

（ズドン）

「次は何だよ・・・！」

上条は病院の入り口の方から聞こえた・・・というよりも響いたその正体を確かめに向かう。

「おいおい・・・ もうこれは、科学とか魔術とか言ってる場合じゃないなくなってきたぜ・・・！」

そこにいたのはゆうに3メートルは超すだろう真っ黒な熊。

（クソッ・・・どうしたらいいんだよ・・・！！）

「これを・・・！！！！！！」

「！？」

飛んできたのは何やらきれいな玉・・・？

投げてきたのはさっきの看護師。

「これをどうしろっていうんだよッ！！！！！」

（どうする・・・？こんな物理的攻撃は俺の右手じゃ受け止めるなんて無理だ・・・）

その瞬間、玉が輝いた。

「！？」

next...

第1問 異変（後書き）

ども、かしすです。

第1問どうだったでしょうか？

自分なりにがんばってみたのですが・・・

もし、気に入ってもらえたら嬉しいです！！

感想もお待ちしております・・・

第2問 対峙（前書き）

はやくもあの方登場。

第2問 対峙

a t 学園都市 病院前 一般外来入り口

玉の変化に驚く間もなく黒熊がこちらに突進してくる。

今なら上条は避けることができるだろう。

だが、あれが病院に突っ込んだとしたら？

中にいる身動きがとれない学生はどうなる？

「どうすりゃいいんだよッ!!」

上条は叫んだ。

「ねえ、超電磁砲^{レールガン}って知ってる？まあ、なんか知らないけど今は使えないのよねー だから、これで、勘弁・・・ねッ!!」

この声は、

「ライトニングッ!!!!!!」

超電磁砲^{レールガン}こと学園都市、7人の超能力者^{レベル5}の1人、御坂美琴。

御坂が放った・・・というより熊の頭上に落とした雷撃は地を伝って上条のところまできたがそれは右手で打ち消す。

「グワアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

熊にもこの雷撃は結構効いているようだ。

「おい、御坂！！お前無事だったのか！？」

上条は御坂に駆け寄る。

御坂は上条の顔を見ないで答える。

「まあね。じゃなきゃ私はここにいないし、アンタを助けられなかったでしょ」

「ああ、サンキュー御坂。つか、さっきのは何だ……？らいと……」

「『ライトニング』ね。ゆつくりと説明してあげたいところだけど・
・そんな暇もないみたいよ?」

熊は立ち上がっていた。

なんかキレているってことは……

「またくるか……？」

「そうなる前に止めるわよ!!」

「ああッ!！」

上条と御坂は病院とは反対の方向に走り出す。

「ってアンタは何もできないでしょーがッ!！」

「できるとかできないの問題じゃねえッ!！」

「はあ!？」

「実際なんかできるような気がすんだよッ!！」

上条は思いっきり左手を振った。

すると……

「うおッ!？」

上条の左拳から生まれたエネルギーが波状になって熊の方へと飛んで行った。

驚いたのは上条だけではなかったらしく。

「何よ今の……?」

上条は最近土御門がやっていたテイルズというゲームを思い出す。

ということ、で。

上条当麻 『魔神拳』 習得

その後も上条は熊に向かって魔神拳を撃ちまくる。

「ギャオオオオオオオオオオン・・・」

熊は静かに倒れた。

「…………死ぬかと思った」

a t 文月学園 Fクラス

これは後から知ったことなんだけど、こいつらは当麻のところにも現れたらしい。

『……………』

一同哑然。

「…………雄二。どうする・・・？」

「あ、明久くん・・・？は、入ってきますよ・・・？」

入ってきたのは直径5メートルはあるだろう力二。

僕が昨日やったゲームにも似てるやつでてきたな・・・

（ドスン、ドスン……）

下の階から聞こえる地響きのようなあいつの足音。

さあ、どうする？

たぶん、あいつが歩いている通路にも生徒がいるだろう。

考えたくないけど踏まれた生徒は……

「雄二」

「……何だ、明久？」

いつになく真剣な声の雄二。

微妙に恐怖の感情が入っているような気がする。

「どうやったら倒せる？」

「アキッ!？」

素っ頓狂な声を出したのは美波。

「だめじゃ！明久。流石に危険すぎるぞい!!」

秀吉も制止に入る。

だけど、このままじゃ……

「よし、行くぞ明久」

「「坂本（君）！？」」

女子2人の悲鳴が交差する。

「でもな、島田、姫路。このままじゃ埒が明かない。だからいつてこのまま飛び出すのも非効率的だ」

「…………じゃあどうするの、雄二？」

霧島さんが雄二に訊く。

「そうだな、あいつと真正面から戦ったとしてもほぼ勝ち目はないだろう」

「じゃあどうするのじゃ、雄二よ」

「はあ、お前達ここをどこだと思っている？」

ここ？ここって……

『あ、』

『召喚獣！……！……！……！』

なるほどな。あれ、でも召喚獣って普通は物理干渉できないんじゃないかなかったつけ？

「その通りだ。それと丁度よく、観察処分者がいるもんでな」

え？

a t 文月学園 新校舎 1階 廊下

「雄二、後で貴様を殺す」

「上等だ、殺れるなら殺ってみろ」

何で僕だけがこんな目に！！

「しょうがないだろう。物理干涉できる召喚獣はお前しか持っていないんだからな」

「フィードバックもあるんだよ！！！！それと雄二は安全なところからフィールド張ってるだけじゃないか！！！！！！」

白金の腕輪。

これは少し前清涼祭で手に入れたものなんだけど・・・

まさかこんなことに使うことになるとは思ってもいなかった。

「俺のは教師不在でも召喚フィールドを作れるタイプのやつだからな。しょうがないだろう？それと安全なわけないだろう。明久が動く度に俺も動かなきゃいけないだからな」

「それでもほとんど安全じゃないか……」

「お、明久来たぞ」

「えええ！？」

前にはさっきの力二。

僕らを見つけるや否や、大きな鎌を振り回してきた。

「**起動！！**」

雄二が腕輪の起動キーを言う。

その瞬間その場に召喚フィールドが張られる。

「おおおおお！……！！！」

一気に僕は召喚獣を力二の目の前まで跳躍させる。

力二はまたもや鎌を振り回す

「遅い！！！！！」

すでに僕の召喚獣はあいつの背後にまわっていた。

まずは1発。

召喚獣の武器、木刀で本気で相手を叩く。

「あれ……？」

確かに召喚獣の攻撃は当たった。

当たったはずなのに・・・？

返ってきたのは僕の腕に響くジンジンとした痛みだけ。

「おい、明久！！手加減なんていらねえぞ！！」

雄二も結構焦っているようだ。

こんな雄二、二度と見られないような気がするけど、今はそんなこと気にしている暇なんてない！

僕はもう一発、カニに攻撃をくらわす。

だけど・・・

「折れた！？」

たったの2発で折れるなんて・・・

しかもカニの方も全然ダメージを受けているようには思えない・・・

一応召喚獣の攻撃力は人とは比べ物にならないくらい強いのに・・・！！

「明久！！ここであいつを止めるぞ！！！！」

「ええ!？」

ゆ、雄二!？

いつもなら逃げるはずなのに!？何で・・・？

こいつのことだ。何か策があるのだろうか。

でも、耐えられるかな・・・？

僕はとりあえず、そこに落ちてた箒の柄を拾う。

そのまま力二に向かって投げる。

「おらあああああああ!!！」

少しでも気が引けたら・・・なんて思ってたけど。

(ドスン)

「あれ？」

力二の顔(？)あたりに箒の柄が直撃し、力二は1歩後ろに後退した。

「これは・・・もしかして!!！」

いわゆる、変な世界にワープしたと思ったならいつの間にか能力がついていたとかいうやつだろうか!？

なら昨日やったRPGの技のものまねでもしてやろう!!

「魔神剣!!」

そう言つて、またそこで拾つた筈の柄をおもいきり振つた。

「グワアアアアアアアアア」

いける!!

「雄二!!」

「ああ!!!!!!!!!!」

「「魔神連牙斬!!」」

（ドスン）

「「よっしやああああああああああ!!!!!!!!!!」」

（ドスン）

「「!?!」」

雄二までもが油断していた。

まだ、カニは生きていた。

（ズバッ）

刹那。

カニは真っ二つになっていた。

「後ろガラ空きだぜ？」

吉井明久 魔神剣 習得

坂本雄二 魔神拳 習得

共鳴術技 魔神連牙斬 習得

a t 病院 一般外来 入口

上条と御坂はあるカエル医師の病室の椅子に医者と向かい合つように座っていた。

ここだけは、他とは違って混み合っていない。

「で、御坂さっきのは？」

上条はさっきのことを訊ねる。

「ああ、あれね。なら、最初から話す必要があるわね」

「今日の朝、起きてみたらこの通り。黒子はもう既にいなかったし、部屋を出てみればみんな気を失って倒れてるし、それに超能力も使えなくなってた」

御坂は続ける。

「だけど、ね。何か頭の中にいつもとは違う・・・妙な・・・渦みたいなのが渦巻いてた。そして、少し、雷が落ちるようなイメージを試してみたら・・・あれってわけ」

それがあの『ライトニング』だったのだろう。

話が一通り終わると、カエル顔の医者も喋り出した。

「ふむ、患者の脳を調べてみたんだけどね、普通ではありえないような結果がでてきたんだよ」

「「普通じゃありえない？」」

「脳というのは、まだ完全に分かっているわけではない。それは知ってるよね？」

御坂は頷いているが、上条は全然分かっていなかったことに少し危機感を覚える。

そつえば期末はイツダツケ？

「その患者の脳からは普通では働かないようなところが常時、活発に活動しているようなんだ。たぶん、それがこの異変の正体かもしれないね？」

「じゃあ、その副作用のせいで気を失ってるってことですか？」

御坂が訊ねる。

「ほぼ、間違いはないだろうね。それに、この異変は全国に広がっているらしいからね？」

カエル医者がテレビのリモコンのスイッチをいれる。

『日本全国で子供が急に気を失い、病院に緊急搬送されるというケースが相次いでいるようです！あつ！速報が入りました！！全国でとても巨大な謎の生物が出現しているようです！！』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

慄然。

テレビでは現在、謎の生物とやらの映像を映し出している。

カエル医師はテレビを消す。

「それとね、キミに渡したそれはリアルオーブといって、その人の潜在能力を高めるものなんだ」

（だから、さっきあんなことができたのか）

「リアルオーブは経験を重ねることによって、どんどん成長していく。まあ、しばらくはこれが続きそうだから必須だろうね」

n
e
x
t
:

第2問 対峙（後書き）

御坂の習得技（現在） ライトニング

ピコハン

御坂は基本、雷技ですねー

外伝 召喚獣と爆炎の雨 第1問 闇の中の少年（前書き）

えーと・・・

これはですねえ・・・

他に連載していたもう1つの学園都市ストーリーです。

これからは、本編と外伝を交差させながらストーリーを続けていくつもりですのでよろしくお願いします。

外伝 召喚獣と爆炎の雨 第1問 闇の中の少年

光輝く表世界。

欲望渦巻く裏世界。

その裏世界を人々はどう呼ぶ。

世界の闇と

a t 7月19日午前1時

「また残務処理？あーメンドクサー」

とある少年が小さな声で呟いた。

その少年は背は160センチくらい。

世間と言えば、美少年と言われる部類であった。

今彼はとある高校の制服を着ていた。

彼の目の前には、バットに鉄パイプ。更には拳銃を持っている輩もいる。

いわゆる、不良。

だが、ここではスキルアウトと呼ばれることが多い。

「ああ？何だてめえ？」

目の前のリーダーだと思しき、少し背の高い少年がケンカ腰の口調で言った。

刹那。

「うわあああああ！！！！」

あああああ！！！！！」

1人の少年の悲鳴と同時に何か焼^{ただ}き爛れたような不快な匂いがその場に充満する。

それを皮切りに複数の悲鳴が交差する。

少年はそんなことは気にせずその場に背を向けもと来た道に戻ろうとする。

「まあ、運が悪かったんですよ。ごめんなさい」

大して悪びれた様子は無かった。

それはこんなことは日常茶飯事、だから、気にするようなことではない。と言っているようなものだった。

「クソ野郎……！！！！！！！！」

この焼け野原の中生き残っているものは皆無に思われたが、ただ1

人、生き残っていた少年がいたらしい。

だが、彼も全身に火傷を負っていた。

そんな彼は最後の力を振り絞り、自分の能力で具現化させることができる最高の炎を作り立ち去ろうとしている少年目掛け飛ばす。

「!？」

だが、それは叶わなかった。

何故なら、目の前に急にそこらへんの廃材を書き集めた即席の盾ができたからである。

「そんな………バカ………な………（バタッ）」

そこで少年は息絶えた。

at 7月19日午前1時30分

「あーあ………目的は達成したし、早く帰ろぉー」

少年は先ほどまでいた、路地裏を後にし、今は角にあったコンビニで今日の朝食を調達していた。

適当に弁当を手にし、レジへ向かう。

会計を済まし、外へ出た少年はそのまま帰路につく。

そこに。

（ズバッ）

砂鉄でできた鋭い槍のようなものが飛んできた。

「おおっと！！危ねえよ！！」

少年はそれに対し、自ら炎の盾を作り防いだ。

「ほー、それが命の恩人に対する礼儀というものですか？『爆炎の
レインザフレアこよい
雨』 榊原今宵くん？」

どこからか声が聞こえた。

そこから察するに相手は女子らしい。

今宵と呼ばれた少年は今の攻撃を無かったことのように、涼しい声
で返す。

「いきなり危ないじゃないか。『マグネシエイク磁場調整』 榊原夜鈴サン？」

言った瞬間に声の主らしき少女がどこから飛び降りてきた。

彼女は制服を着ていた。

しかし、そこからでも彼女のスタイルのよさは滲み出している。

自分のクラスのとある少女が見たらが悶絶してしまうくらいの。

「・・・じゃあ、さっき助けてあげたのは誰だと思ってるの?」

「天の奇跡」

(ズバッ、ズバッ)

数多の砂鉄の槍が飛んでくる。

「分かった、分かったっ!! ありがとうございました!!! 貴女様がいなくては私死んでおりました!!!!!!」

今宵は必至にその場を収めようと、大声を出して感謝の意を提示する。

「はぁ・・・今宵は一応私の義兄^{おに}ちゃんだから・・・しっかりしなさいよねッ!!」

「へいへーい」

今宵と夜鈴は血は繋がっていない。

兄妹というのは戸籍上のことだけで、実際何の共通点もない。

あるとすればどちらも同じ『置き去り(チャイルドエラー)』だったということだけか。

『置き去り(チャイルドエラー)』——つまり、捨て子である。

ここ学園都市はある理由で捨て子が多い。

その理由は後で話すとして、こういつ子供達は後に2つの道をたどる。

1つは置き去り（チャイルドエラー）用の施設に拾われるか。

もう1つは――

学園都市の闇に吸い込まれるか。

そのどちらかである。

今宵と夜鈴の場合、後者のほうだった。

置き去り（チャイルドエラー）は研究者にとっては恰好のモルモット実験道具。

身寄りもなく、存在すら危なくなった子供達はそうやって闇へと引きずりいれられる。

そこで様々な実験を施され、ほとんどの子供はその段階で死に至る。

しかし、少しの子供達はそれ乗り越え学園都市の闇の仕事にかりだされる。

これが、闇の末路。

気がつくと、第7学区、今宵の寮の前まで来ていた。

ちなみにほとんどの学生はこういった寮で暮らしている。

「じゃあ、また明日！」

夜鈴も自分の部屋へと帰る。

「うん、また明日な！っていつかもう今日だけだな」

これが彼らの1日だった。

a t 7月20日 午前8時

「…………いきなりかよ……」

今宵はため息をついた。

文月学園に来て最初に目の前に映ったのはFクラス恒例、FFF団による異端審問会だった。

「おはようなのじゃ、今宵」

「おはよう秀吉。で、今日は誰？」

秀吉はほとんど呆れ顔で言った。

「当麻じゃ。ワシも朝からあれを見るとやる気をこっそり持っていられるというのにな」

「へえ。珍しいな。あいつが異端審問にかけられるとは夢にも思っていないかったぜ」

上条当麻。

ツンツン頭が特徴的な中肉中背の平凡な高校生。

だが他の人と1つ違うといえば。

異能の力を全て打ち消す謎の右手。

しかし、これは超能力とは何の関係が無いらしいが、こんな特殊な能力、学園都市の闇を渡り歩いてきた今宵も初めてである。

件の上条は現在審問中らしいが、一体何を侵したのだから、少し興味があつたので近寄ってみた。

『では、罪状を確認をする』

『はっ！！』

『おいっ！待て、須川！！俺は何もやってねーし、した覚えもねえぞ！！』

『上条当麻は以前近くの河川敷にて、常盤台の女子中学生と触れ合
って楽しんだり、雷にやられて嬉しそうにしていた次第であります
！！』

『平たく言えば？』

その時クラスの担任が入ってきた。

「さーみなさんー。先生のHR始めますよーって何やってるんですかっ!？」

担任の名は月詠小萌。

身長135センチの数学上あり得ない体を持つ正真正銘の先生だ。

「異端者の排除です!!先生!!!」

「それは胸を張って言うことじゃないですよ!吉井ちゃん!!!」

『確かに……』

実は異端審問会は小萌先生が一喝すると、止まっちゃったりする。

「さあ先生のHR始めますよー」

「助かった……」

文月学園は学園都市の中でも特異な高校である。

文月学園が開発した召喚獣は今や、学園都市の学校で普通に使用されている。

その理由は学習意欲の向上というありきたりなもの。

ちなみに学園には分校が3つあり、偶に交流試合などしたりしている。

で、

「8月20日、21日に常盤台中学との学校間試合戦争が決まりましたよー」

「はあ？」

思わず声を出してしまった。

「って先生！どういうことですか！？何であんな超名門中学が試合戦争なんて仕掛けてくるんですか！？」

そう言ったのは明久。

学校間試合戦争とは、学園都市一帯を全て召喚フィールドにし、敵の学校まで侵攻、そして学校の代表者を倒せば勝利となる。

そして、敗者の学校はその学校の予算を奪われてしまう。

予算を失うということは、その分扱いが酷くなるということを示し

ているが――？

「で、どうするんだ、坂本」

上条はこちらブレイン坂本雄二に尋ねる。

「そつだな。まあここは引き分けが無難だろう」

学園都市一帯をフィールドにして試召戦争を行うのだから当然時間的な制限は必要となる。

それに、どちらも全生徒を動員するのだ。

時間制限を加えないとけが人をだす可能性もある。

そこで登場するのが引き分け。

簡単に言えば時間内にどちらも代表を打倒せなかった、という状況を指す。

それを雄二は故意に作り出そうといったのだ。

「それはそうですね・・・でもどうやるんですか？」

「そうよね、そうは言っけど実際は一回の引き分けになったことは無いって言ってたじゃない」

そうだったのは姫路瑞希と島田美波。

「それは後で考えておく。まあ、そんなときを楽しみにしとけよ」

a t 7月20日午後5時頃

「で、どう思う？雄二」

放課後。今宵はいつも坂本、吉井、秀吉、ムッツリーニ、上条、夜鈴のメンバーで帰っているのだが、今日は2人抜けて5人。

上条は少し気になることがあると言い、ダッシュで帰宅。

夜鈴は今日はお休み。

「そうだな、どう考えても裏があるとしたか思えない。だが、今の段階では何がどうなって動いているか全然分からない」

「坂本でも分からないか。本当にどうなってるんだろっなあ。あの有名中学が文月学園なんて低レベル能力者しかない高校に勝負を挑んでくるなんてな」

と、今宵。

学校間試召戦争では超能力の行使も可能である。（行使できるレベルは決まっているが）

常盤台といえば、全員が強能力者（レベル3）以上という学園都市

でも5本の指の中に入る超名門校。

何度考えても勝負を挑む理由が見つからない。

それはIQ200の頭脳を持っていると噂の坂本も同じようだ。

「じゃあ、やっぱり引き分けを狙うの？雄二」

「じゃが、引き分けは今まで一回もなかったことはないと聞くのじゃが…」

「……………前代未聞」

その通り。

学校間試召戦争ではこれまで一回も引き分けにならなかったことがない。

それは、生徒数の多さや超能力の行使等々……

引き分けになる要素は基本ない。

「はぁゝ。また設備が下がっちゃまうのかよ。ってたく、今日は何回溜息吐いたんだよ……。まあ、そんなときはそんなとき……。ん？」

今宵が今日何度め溜息をついたその時、視界の端に修道服（というのか？）を着た外国人っぽい男が映った。

それを目で追うと、路地裏に入って行ったらしく、もう姿は見えなくなってしまった。

学園都市の闇を知る今宵から見ても物凄く不自然な光景だった。

ということだ。

「っおい！待てよッ！！」

その路地裏に入っていく。

「ちょっ！？今宵どうしたの！？」

「明久達についてくるな！！！！」

「えッッ！？」

そのまま修道服の男達に着いていくように駆けてゆく。

（あいつら何処に行きやがった？）

そこはつい先日とある不良達を殺めた場所だった。
スキルアウト

（なんつーか・・・わざわざって感じだなあ）

そうは思っが、全然罪悪感を感じているわけではないが。

「罪人には鉄槌を」

何処からか声が聞こえた。

瞬間、頭上から鉄の塊が降ってきた。

「はあ!？」

咄嗟に右に飛ぶ。

「ちょ、超能力!？」

(いや、違う?こんな能力は見たことがない。それとも見たことがないだけなのか?でも、こんだけの質量の鉄塊を頭上よりもっと高い位置から降らせることができる超能力者がいるとすれば超能力者(レベル5)。けど、学園都市の7人の超能力者(レベル5)にそんな能力に心当たりなんて・・・)

「ほう、避けたか」

「つつか、誰だよ!テメエ!?!うわっ!」

言う間もなく、次々と鉄塊が降ってくる。

「天に昇れ。罪人」

「はあ!?!罪人!?!何のことだよ!」

(ボワツ)

その瞬間、鉄塊が蒸発した。

「まったく……何度も何度も同じ手くらうかよ。とりあえず、お前は何でこんなとこにいいのか。それとその能力と、目的を吐きやがれ」

今宵は少し離れたところに立っている男に問いかけた。残念ながら修道服のせいで顔は見えない。

「そんなことか。科学とかいう、異郷の地で芽生えた愚行などより、もつと誇り高く、歴史深い、それが私の使っている魔術というものだ。お前みたいな愚民には分からないだろうがな」

「科学にもちゃんとした歴史ぐらいあるんだがな」

「それ、と。私の所在だったか。私達の目的はここ学園都市に現れた“禁書目録”を回収すること。これが『不死鳥の爪を剥ぐもの（ロストフェニックス）』の意味だ」

（つーか……どこの厨二だ？こいつは……）

「今禁書目録はこの近くの男子寮の近くにいるようだな。私達は記憶を完全に消去された後の禁書目録を回収するのだが、その道中、死人の魂を感じたのでなあ。寄ってみたのだ」

「……………」

何の反論もできなかった。というよりただただ呆れていた。

そんなオカルト染みたものにこいつは生涯を捧げているというのか？

ただのバカとしかいいようがない。

（そうは思っがやっぱりその魔術とかいうのは本当……なのかもしれない）

そういえばこいつは“私達”とか言っていたか。

ということとは・・・

「他にも仲間がいるってことか？」

「「！？」」

言ったのは今宵では無かった。

そいつは・・・

「坂本！？」

「ごめん、今宵。先に帰って言われたけどあんなに切羽詰まったような顔をしてるんだから、流石につけていく他なかったんだ」

「全て話は聞いたぞい。そこのお主。一体何をしようとしておるのじゃ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・明らかに挙動不審」

文月学園Fクラスメンバーが一気に男を追い詰める。

そして追い打ちと言わんばかりに。

「ってか、気配だしすぎなのよねえ。あんた達」

（ドロン）

「ゲハア!？」

そこらへんのゴミをかき集めて作られたボール状の塊が男の背中に突き刺さった。

そいつの後ろにいたのは榊原夜鈴。

彼女は『マグネシエイク磁場調整』と呼ばれる学園都市の大能力者（レベル4）。

「夜鈴・・・?.....そういうことか。だからお前は今日休んだんだな?」

「どういうことじゃ?今宵。話がまいち掴めないのじゃが・・・」

「調査してたんだろ。こいつ“ら”のことを。どう考えても反乱因子にしか思えないようなこいつらのことを」

そこらへんは流石の坂本。それに比べ吉井は・・・?

「ハンランインシ?」

いつも通りだった。

「とりあえず連行するけど。残りは何処?」

夜鈴が言う。

しかし、男は何かおかしいのか、大声で笑いだした。

「そのうち始まるだろう?」

「はあ？」

(バコンッッッ)

『！？』

空気を振動させ、とてつもない爆発音がその場を轟かせた。

爆心地は・・・？

『上条家！？』

吉井はほぼ反射のように走り出した。

「おいッ！ちよつと待てよ！？」

今宵もそれに釣られて走り出す。

「じゃ、夜鈴。そいつは頼んだ」

坂本も男を夜鈴に預け今宵と吉井を追いかけるように走り出す。

ちなみに今宵と夜鈴は名字が同じなので名前で呼ばれることが多い。

「待つのじゃ、雄二！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・置いてくな」

それぞれがとある男子寮に向かって走り出した。

「じゃあ、行きましようか？」

a t 7月20日午後6時頃

「何だ・・・これ……？」

吉井は思わず言葉を失った。

どんな法則で成り立っているかは知らないが目の前の光景は科学ではおそらく説明しがたいものだった。

「まるで炎が走り去った後みたいじゃな・・・」

「ってそんなこと言ってる場合じゃないよ！！早く当麻を捜しに行かなきゃ！！」

吉井はさも当たり前前という感じで寮のエレベーターに乗ろうとする。

「待て、明久」

「こんなときに何だよ！雄二ー！！」

「バカかお前は……………何でこんな時にエレベーターなんて使おうとするんだ？途中で止まったらどうすんだ？」

「あ……確かに……」

「じゃあ坂本。お前ならどうするんだ？」

「ああ、もちろん階段だろ」

Fクラス愚連隊。出発。

n e x t
…

外伝 召喚獣と爆炎の雨 第1問 闇の中の少年（後書き）

榊原今宵と榊原夜鈴は登場人物のところで詳細を書いていきます。

それと、今後ですが、外伝のストーリーも本編にかかわることが多くなりそうです。

もう1つ、これにもぬらりひよんの孫をコラボさせることにしました！

これからもどうぞよろしくお願いします。

第3問 出会い

上条 side

at 第7学区 路上

上条と御坂はカエル顔の医師の話聞いた後、原因を探る為、それと適応者を捜す為歩いていた。

適応者というのは、脳の異常活動に対し、自らの意思で力を制御 + 自分の意思で行動しているものを指す。

力を制御というのは、この脳の異常活動はどうやら人間の潜在能力を引き出してしまいうらしく。

その時の副作用により、ほとんどの学生は倒れてしまったのである。

なぜ子供だけが？という疑問はまだ解決されていないがあのカエル医師ならすぐに理由を導き出すだろう。

「つか・・・ 何の手掛かりもなくどこを探せって言うんだよ・・・」

上条がつぶやく。

「しょうがないでしょ。RPGじゃあるまいし、そんな簡単に見つからないわよ」

そんなこと心の中では分かっていたが、どうにもここでは原因の手掛かりすら見つからないような気がした。

「ん？あれは・・・？」

上条が交差点の近くで動いている何かを見つけた。

「適応者！？」

御坂がそれに向かって走り出す。

「おい！待てって！？」

上条もそれにつられて走り出した。

だが、その前に。

「グワアアアアアアア！」

さっきと同じような化け物が現れた。

違うのはそれがゴーレムのような怪物だったこと。

「ッ！邪魔だ！！」

上条はさっきと熊を倒した時に覚えた技『魔神拳』を使い牽制をする。

「？」

魔神拳は確かにゴーレムに命中したはずだった。

しかし、全然効いているようには思えなかった。

その証拠に当たったところには傷1つついていなかった。

上条としては牽制＋ダメージを想像していた。

だが、その結果は、気をこっちに逸らしただけ。

それは上条達の身に危険が迫っているということなのだが。

「ああ・・・もう！！何やってくれてんのよ！！ライティングッ！！！！」

御坂がゴーレムの背中（？）あたりにライティングを放った。

「えっ！？嘘！？」

先程、熊に結構なダメージを与えたライティングもほとんどゴーレムにはダメージを与えられなかった。

その間にもゴーレムは上条達に近づいてきていた。

「クソッ・・・どうする・・・！？」

もうゴーレムとの距離はそれほどない。

このままだと、上条と御坂は一瞬でスクラップのようになってしま
うだろう。

「巻空旋!!」

(ズバッ)

誰かがそう叫んだ瞬間、ゴーレムは宙に投げ出されていた。

「レインバレット!!」

そこに、追い打ちといわんばかりに上空から雨の如く、エネルギー
の塊が降ってきた。

「大丈夫ですか!？」

上条に手が差し伸べられる。

「ああ、大丈夫・・・？」

目の前にいたのは、黒を基調とした服を着て、また、手には手甲と
いうのだろうか？そんなものを付けている少年だった。

強いて言えば、RPGとかにでてきそうな少年である。

「どうかしたんですか？」

「あ！ いや何でもない。助けてくれてありがとな。それと、お前
の名前は・・・？」

上条はその少年に訊いた。

「ジュード・マティスです」

「ジュード！！まだ死んでないぞ！！！」

「え！？」

その時にはもうゴーレムの腕はこちらに振られていた。

死ぬ！と上条が感じ取ったその時…

(ガシッ)

何者かがその腕を掴んだ。

『!?!?』

ジュードと上条はその一瞬を見逃さなかった。

上条のリリアルオーブが光を放つ。

「行くぜ、ジュード!!」

「うん!!」

「ダブルブレイカー!!」

ゴーレムは音も無くその場に倒れた。

共鳴術技 上条+ジュード ダブルブレイカー 習得

next...

チャット リアルゲコ太!?

御坂「リアルゲコ太!!」

上条「おいおい… 流石に先生に失礼じゃないか?もしかしてあの顔・・・悩んでるかもしれないぞ」

御坂「写メ、写メ・・・」

上条「おい!聞いてますか!」

御坂「ちょっと黙ってなさい!!」

上条「病院で携帯は…」

そこらへんの医療器具 (ビービー)

御坂「ハッ!？」

上条「ほらみる・・・」

第3問 出会い（後書き）

今回は時間が無かったのでかなり短めですね…

ジュードと上条の共鳴術技のダブルブレイカーですがオリジナルです。

感想も貰えるとうれしいです！

第4問 邂逅（前書き）

あー・・・

1話前の『ダブルブレイカー』についての説明をしていませんでしたw

wじゃねーよッ！とか思っている方、すみません…

『ダブルブレイカー』・・・共鳴で結ばれた2人が同時に魔物の頭上高くに飛び、途中で交錯するように、魔物に強烈な蹴りをくらわせる。

第4問 邂逅

明久side

「後ろガラ空きだぜ？」

そこにいるのは・・・

「リクオ君！？」

そこにいたのは我が幼馴染奴良リクオ。

「どうしてこんなところに・・・？」

「まあ、オレもここに来るつもりはなかったんだが・・・ なんか
やばそう奴が明久を襲ってたんでな」

そうだったんだ・・・ 本当に九死に一生って感じだったよ……

「……………」

ん？雄二がリクオ君が突き破った壁（後で絶対に鉄人に怒られるだ
ろうなあ・・・）の向こうを見て絶句してる？

何かあるのかな・・・！！？

「！？」

その壁の向こうにはさっきのカニカニカニカニカニカニカニカニカ

二カ二カ二カ二カ二・・・

ざっと数えて20体弱くらいはいるだろうか？

こういう風景を見てみると、鉄人に追いかけられた記憶や姫路さんの料理で死にかけた記憶がとても良い思い出に………はならない。

「って今度こそ死ぬッ!!」

(バツ)

リクオ君が風の如く、僕の前からいなくなっていた。

あれ？それって・・・

「流石にリクオ君でも危ないよッ!!」

ああもう!!クソツタレがアアアアアああああああ!!!!!!

「死ねえエエえええええええ!!!!」

自分の顎に指を置いて何か考え事をしている雄二は無視して走り出す。

まあ、もともと雄二なんて当てにしていなかったからいいけどねっ！

(ガンッ)

僕が持っていた箒の柄とカニの甲殻がぶつかり火花をあげる。

箒の柄がなぜ折れないのかは諸事情ってことで。

「明久！？ テメエ、ここにいたら死ぬぞ！！」

「リクオ君こそ一人で行って危ないとは思わなかったの！？」

偶々リクオ君とは丁度背中を合わせるようにしてカニに向き合う。

気づけばここは生徒昇降口。

昨日まではこんな修羅場じゃなかったのに・・・

「ったく・・・ 死んでもしらねえぞ！！（ダッ）」

「そつちも、ねッ！！（ダッ）」

リクオ君と僕はそれぞれ逆の方向のカニに向かって走り出す。

カニに向かって走り出すっていう表現はいかにもバカらしいけど、相手は全長5メートルのカニなので、ゴ。ラ数体が町で暴れている、カオスなイメージを持ってくれるととてもありがたい。

僕は近くにいたカニに標準を定め魔神剣を撃つ。

「魔神剣ッ！！」

カニはさっきと同じで、結構なダメージを被った模様。

だけど、やっぱり単発では威力が足りない。

考える間もなく別の力二が僕目掛けて鎌を振ってくる。

「ッ！？（ヒュッ） 危なッ！？」

僕もギリギリなところで避ける。

だけど避けた先にも力二がいた。

その力二の攻撃は箒の柄で受け止め、僕はそのまま1回転。箒の柄に自分の鎌を預けていた力二は前によるける。

器用に力二を避けながら、1番最初に魔神剣をぶつけた力二の背後に回り込み、本気の一撃を決める。

「うおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

（ガンッ）

派手な音がした。

同時に力二が前に倒れた。

「よし、次！！」

まだ、僕の周りには大量の力二がいる。

失敗すれば、数秒でひき肉になってしまうだろう。

でも。

絶対に。

どんな理不尽な状況でも。

この戦い、負けられない。

リクオside

リクオは内心焦っていた。

現在彼の周りには本来いるはずの護衛の妖怪達がいらない。

それはもちろん自分が指示を出したのだ。

リクオ個人のお願いではない。

奴良組3代目総大将としての命令である。

（キンッ）

刀と力二の甲殻が互いに拮抗する。

リクオは刀をそのままに身を翻す。

刀と鎌。

均衡状態になっていた、2つの武器はリクオの行動によって、別々のエネルギーを生み出した。

鎌は前に持つて行かれ、大きな隙ができ、逆に刀は力二の背後の方
向へ自然に動く。

（ザンツ）

リクオが力二の背甲を斬った。

「これで……1匹、か」

周りを見渡す。

四面楚歌。

ある意味背水の陣とも言えた。

「校舎の方には……行かせねえ!!!!!!!!!!!!!!」

リクオはここからが本番だ、と言わんばかりに叫んだ。

「ミラッ！ローエンツ！！」

「あれは・・・」

「ふむ、躊躇している暇はなさそうだ」

少女は自分の戦闘意思を仲間に確認させ、走り出した。

明久side

「ハア、ハア・・・」

僕とリク才君はまた背中を合わせていた。

さっきと違うところは既に2人とも満身創痍のように見えたところ。

僕達2人で倒せた力二の数は約4分の1程度。

普段、戦闘（特殊なものを除く！！）に慣れていない僕にとって、1時間前に手に入れた能力を完全に扱いきれていなかった。

そして、力二は容赦なく僕達に迫ってきている。

僕はここで終わってしまうのだろうか？

いやだ、いやだ、そんなのいやだッ！！

「うああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「明久!!!」

僕は箒の柄を思いっきりそいつらに投げた。

たとえ悪あがきと知っていても。

何かはしたかったんだと思う。

「ネガティブゲイト！！」

幼い少女のような声が響いたと思えば、カニの足元から闇の手が何本も伸びてきてカニを攻撃していた。

え？

(タンツ)

上空には僕が投げた筈の柄を足場にジャンプをする女性がいた。

ええええええええええええええええ！？

そのままその女性は力二を斬り倒す。

す
こ
い
・
・
・

たった一撃で……！

「ユ、ン、フ、ン。」

その声が僕に掛けられたと気づくまで少し間があった。

「……うん。僕はそのままやられっぱなしなんていやだ」

「その返事が欲しかった!!」

本当の、本当の本番はこれから始まる。

n e x t
∴

第4問 邂逅（後書き）

感想いつでも待ってます!!

外伝 第2問 魔術（前書き）

外伝開始ッ！

外伝 第2問 魔術

「何だよ・・・これ!？」

寮の壁一面に何やら意味の分からない紋章が書かれたコピー用紙が無数に貼ってあった。

今宵はそのうちの1つを剥がす。

(これが・・・魔術?)

今宵は先程魔術を名乗る攻撃を受けていた。

その時は鉄塊を上空から降らせる、というものだったが、現在確認できるのは炎。

ここはまだ炎は回っていないが、余り時間が経たずともここにも来るだろう。

それよりも大事なのは上条当麻の命。

上条は今宵と違って学園都市の間も知らないし、何かが得意だといっうわけでもない。

それに上条は無能力者^{レベル0}。

魔術に対抗する術はない。

(まったく・・・ 何て厄介事持ちこんでんだよ・・・ あいつは・

「普通に寮が燃えてたら誰だって駆けよるくらいはするだろ・・・」

今宵は半分呆れ声。

「で、どうするんだ？このままじゃ俺達死ぬぞ？」

『へ？』

坂本が言った途端上条がさっき通ってきた道が炎で満たされる。

「ちツ・・・もうあいつ来やがったか・・・」

「「「あいつ？」「「「

（これは・・・！？）

今宵はほとんど反射で炎とは反対方向に走り出す。

「おいッ！！お前ら！！！！早く逃げろ！！！！！！！！」

「え！？うん！！！！」

明久達も今宵と同じ方向に走り出す。

今宵が後ろを向くともうそこは火の海と化していた。

よく見るとその中にひっそりと立つ1つの影が見えた。

それは・・・？

「上条！あれ何だよ！！！！」

今宵は後ろを指差して問う。

「知らねえよ！！俺の寮の前で魔術師ってやつがだしたんだよ！！」

後ろにいたのは十字架のようなものを持っている炎の巨人だった。

「魔術師！？なめてんのか！？そんなオカルト染みたこと・・・！
？」

「どうした、今宵？」

「ある・・・そうか魔術。これが・・・！？」

「当麻、今宵！！前！！！！」

「「は？」
「」

「うああああああああああああああああああ！！！！！！
！！！！！！！！！！」

『上条（当麻）！！！！！！！！！』

（ゴロンゴロンガタンボタンガシャン）

（そついえばここつて5階じゃ・・・）

妙な音を伴い上条は落ちて行った。

途中に駐輪場の屋根があつたのがせめてもの救いか・・・？

「今宵ッ！ボーっとしてる暇ないよッ！！」

「ッ！！」

（ボッ）

突然炎を纏った巨人から攻撃を受ける。

今宵はそれを科学が作り出した炎で受け止める。

だが、巨人のパワーはただの高校生が止められるような軟なものではなかった。

（バンッ）

「く・・・」

「今宵!!」

今宵は巨人に自分の炎が破られる前にそれを攻撃とは反対の方向に爆発させ巨人とは逆の方向に飛ばされる。

「大丈夫!？」

明久が今宵に手を差し伸べた。

「ああ・・・ なんとかな」

今宵はその手を握り立ち上がる。

「おい、明久」

坂本が明久に声をかける。

坂本は明久の返答など無視し、話を続ける。

「お前確か水流制御系の能力を使えたよな？」

「え? あ、うん。でもそれが? そんなのがこいつに効くとは思えないんだけど・・・」

「別にそんなことはどうでもいい。本気であいつにぶつける。それと秀吉」

「何じゃ?」

「お前は確か能力補助系の能力だったはずだ。それを使って明久を強化してくれ」

「了解^{ごう}!!」

（完全に俺無視されてるよなー）

坂本は今宵など気にも留めず合図をだす。

「今だ!! 行け!!!」

「うおおおおおおおおお!!!」

明久の能力が秀吉によって強化された水が巨人に向かって飛ぶ。

しかし、その水は巨人によって跳ね返される。

（バンッ）

とてつもない音が寮にこだました。

「これは・・・水蒸気爆発!? うわっ!!!」

今宵も爆発の余波をもろに受ける。

水蒸気爆発とは。

水が非常に温度の高い物質と接触することにより気化されて発生する爆発現象のことを指す。

つまりは、この明久が具現化させた水と巨人の炎とが反応しあい、爆発したということなのだが・・・

（詳しくはググってみてくれると嬉しいかな）

「今宵！逃げるよ！！」

「あ、ああ！！」

n e x t
...

外伝 第2問 魔術（後書き）

中途半端なところで切つてすみません・・・

第5問 共闘（前書き）

少し間があきました。
更新です。

第5問 共闘

明久side

(ダッ)

僕に何ができるかなんて分からない。今の僕は先の戦闘でかなり消耗してるし、ほとんど体力は限界。

このまま敵に突っ込んでも鎌一振りで散るだろう。

でも・・・！

「うあああああああ！！！！！」

(ガンッ)

箒の柄と力二の鎌がぶつかり、そこで拮抗する。
これもそろそろ限界かな・・・？

「そこだっ！！！！！」

(キンッ)

剣の刃が上手く甲羅のヒビに入る。

この声はさっき僕達を助けてくれた女性。
もちろん彼女にもかなりの危険があった。

それなのに、彼女“達”は来てくれた。

「魔神剣ッ！」

(パンッ)

「よし、上手いぞッ！」

それなのに・・・

(ダッ)

「瞬迅剣ッ！！」

僕がちゃんとしなきゃダメだよな？

明久（思いつきで）瞬迅剣 習得

リクオside

「大丈夫ですか!？」

手が差し伸べられる。

気がつくと目の前には60歳くらいの老人が立っていた。

リクオはその手を掴むこともなく立ち上がる。

「お前みたいな老いぼれに心配されるような軟な体なんてしてないぜ」

その声を聞くなり老人は小さく笑い、

「若い人はそれが一番ですな」

と言った。

「ネガティブゲイトツ!」

地面から何本もの闇の手が生え、カニの動きを封じる。

「ローエンツ！！！」

幼い少女の声が響く。

「はいっ！それと、貴方はここで休んでいてください」

今のリクオにとって休めという言葉がなぜか癪に障った。

こんな状況で誰が休めるといつのだ？

「ったく・・・ こんな状況で誰が休めるかよ？」

明久side

「うおおおおおおおおおおお！！！！！！」

「はああああああああああああ！！！！！！」

もはや彼女とは会話を交わしてはいない。
ただ、そんなことしなくても十分だと思っていた。

「あと何匹!？」

僕はあたりを見回す。

えーと・・・

1、2、3、・・・4、5、6、7、8、9、10。

ざっと見て後10匹程度かな？

「後ろだ!！」

「ッ！瞬迅剣!！」

箒の柄を短く持ち直し、前方に思いっきり突き出す。

(キンッ)

箒の柄とは思えないような音が響く。

「グワワワアアアアアアア!!!!!!!」

もはや僕はこの力二を一撃で仕留められるようになっていた。

こうなると話は早く、どんどん力二を倒していく。

「よし、次ッッ！！」

向こうではあの女性が後ろをカバーしてくれている。

「フレアボムッ！！」

（ボワッ）

敵の周りに炎が舞う。

「これならいける！……！……！」

僕は心からそう思った。

リクオside

リクオと老人。

片方は刀を。

もう片方は細剣を。

そして、

「準備はできてるか？」

「ええ、もちろん。いつでも行けますよ」

どちらも武器を構える。

「さあ、行くぜ！！！！」

(ダッ)

リクオがカニに向かって走り出す。

老人の方は何かを発動させ、リクオの上空に大量の質量の水を発生させた。

「今だッ、じじい！――！」

「初対面でじじいとは少し失礼のような気がします。スプラッシュッ！――！！！」

水がリクオに向かって落ちてくる。

そのままリクオに当たれば大変なことになるのは目に見えていたが、リクオは臆することもなく刀を頭上に掲げた。

すると水はそのままリクオに直撃することなく、刀に纏われる。

「散れ、水氷牙・涼」
すいひょうが りょう

リクオが刀を振った瞬間、纏われていた大量の水がカニを包み込みまもなく姿が見えなくなる。

（バッ）

カニを包み込んでいた水が消えた時にはもうカニの姿は無かった。

n e x t
:

第5問 共闘（後書き）

チャットは偶にいれていきます

第6問 a t Fクラス（前書き）

まだ続けますよっ！

第6問 at Fクラス

明久side

カニに向けて箒の柄を前方に突き立てる。

（ズバッ）

・・・箒の柄、丈夫すぎるような？
でも、

「これで・・・最後？」

今僕が倒したカニで全てかな？

「・・・ああ、そのようだ」

女性も肯定する。

「ミラ！」

同時にミラと呼ばれた女性、つまり僕の隣の恩人に、僕の身長の約3分の1くらいの少女が抱きついていた。

なんというか葉月ちゃんに似ているような気がする。

葉月ちゃんというのは美波の妹のこと。

葉月ちゃん無事かな・・・

「明久、お前の無事だったみたいだな」

この声は・・・！！！！

「雄二イイイイイイ！！！！！！！！！！」

この裏切り者オオオオオオ！！！！！！！！！！↑

(ブンッ)

^{かなりマシ}
本気で箒の柄を振る。

ところが雄二は腕を組んだまま一步も動かず、お前はやっぱりバカだという顔でこっちを見ている。

こいつ・・・本当の地獄を見せなくては(ガシィ)・・・！！？

いきなり僕の攻撃が誰かによつて防がれた。

何・・・！！こいつは・・・！？

「戦死者は補習！！！！」

僕の目の前には気持ち悪い笑みを顔に浮かべた生徒指導^{鉄人}の先生が立っていた。

ああ・・・

そういえば、僕の召喚獣・・・戦死してたっけ・・・？

「オレ達も入るか？」

「ええ、まずは現状確認が重要です」

「それでは入るとしよう」

処変わっていつもの2-Fクラス。

「私はミラ＝マクスウェルだ」

と言ったこの女性は僕と一緒に戦ってくれた女性。

何となく僕達とは違う雰囲気を持っているような・・・？

「エリーゼ・ルタス……です」

これは葉月ちゃんと同世代くらいの少女。

手には妙な人形を抱えていた。

と、その瞬間・・・

「こんにちはあー!」

(カプッ)

「うわぁっ!?!」

え、え?あれ?視界が真っ暗・・・!?

「だ、大丈夫!?アキ?」

「顔が大変なことになってますよっ!?!明久くん!?!」

「(うゝうゝ!?!?)」

とりあえず、僕の顔に噛みついているだろう妙な物体を引き剥がそうと思いつき引き張る。

・・・って、伸びる!?

「ティポ!?初対面の人を噛みついちやダメですよ!」

ティポ!?これティポっていつのか!?

「ティポさん。兎に角離れてください。この方が嫌がっていますよ」

「？」

「えゝ？僕なりの愛情表現だったのにゝ」

「「愛情表現！？」」

姫路さんと美波の声が重なる。いや、普通、驚くのはこっちだと思うんだけど・・・

「って、アキは誰にも渡さないわよっ！-！」

「そうですっ！明久くんは誰にも渡しません！-！」

「2人とも少し落ち着くのじゃ」

少女反省中・・・

「お初にお目にかかります、私、ローエン・J・イルベルトと申します。以後お見知り置きを・・・」

深々と頭を下げるローエン・J・イルベルトさん。
どうも調子が狂うなあ・・・

「は、はあ・・・よろしく、イルベルトさん・・・？」

「ローエンで結構ですよ」

「じゃ、じゃあ、よろしく？、ロ、ローエン」

「はい、よろしくお願いします」

（１０分後）

「——その話は本当ですか？雄二さん」

と、ローエン。

自己紹介を終えた僕たちはいまいち事情を呑み込めていないミラ（ちなみに敬称はいいと言われたので呼び捨てにしています）達に学園都市のことや科学のこと、超能力のこと、そして今ここで起きているこの怪事件の概要を知る範囲で事細かに伝えていた。

何というか着ている服といえ、その武器といえ・・・

いくら学園都市だとしても不自然だった。

「ああ、信じられないとは思うが本当のことだ」

雄二がローエンに返す。

「ふむ・・・そのようなことが本当に・・・」

ローエンは何かを考えているようだ。

・・・というか、完全に僕達蚊帳の外なんだけど・・・

「——そろそろそっちの話もしてくれないか？」

雄二がそろそろいいだろう？的な声でローエン——いや、ローエン達に言った。

ん？“そっちの話”？

雄二は今、ローエンを見てはいなかった。

雄二が視線を向けるその先には——

「ミラ、説明を頼みたいんだが？」

矛先を急に自分に変えられて少しは驚くだろうと僕は思っていたけど、件のミラはこっちに話を振られることは既に分かっていたと言わんばかりに言う。

「ふむ、そうだな。そろそろ話すべきだろう。リーゼ・マクシアと精霊のことを、な」

n
e
x
t
:
.

第6問 a t Fクラス（後書き）

1つだけ時系列的な設定をお話したいと思います。

たぶん次話以降で軸になってくると思います。

現在本編では超電磁砲の乱雑開放編の少し前です！

外伝は原作とほぼ同じです

第7問 運命の交錯（前書き）

遅くなりました！

第7問 運命の交錯

（パンツ）

どこからか乾いた音が響いた。

それは誰かが何かを撃った音だった。

「ここ・・・学園都市・・・だよな？」

少年が呟いた。

彼の右手にはハンドガン程の大きさの銃が握られていた。

どうやら先程の銃撃は彼の仕業だったようだ。

その少年は身長160センチ程と小柄、文月学園の制服を着ている。初対面なら女子と見間違えてしまいそうだが、彼は列記とした男だ。

「いや、やっぱり学園都市だ。間違えない。ううん、間違えるものか。」

今、少年の視界には変わり果てた学園都市第7学区が映し出されていた。

道路には気を失った学生がゴミの様に転がっており、それを回収し、車に運ぶ医療従事者達。

救急車が出動できないのは生徒の数がそれを上回っているからだだった。

それよりもおかしいことといえば、ここにこの少年が銃を持ってうろついていることだろうか。

普通なら逮捕されなくてはいけないこの状況に、アンチスキル警備員は彼の存在を黙認し、更には頼りにしているといわんばかりに彼に命を預け行動しているものもいた。

そう、それはこの異変と同時に現れたこの“魔物”のおかげである。

魔物とは、今宵の中で勝手に定義した人智を超えた生き物のことだ。今彼を襲おうをしているのは熊型の魔物。

熊、というものは人間界にもいるのだが自ら進んで人間を襲う熊はいない。

だって、熊はもともと臆病だから。

少年はまたもや、手に持っていた銃を正面に構え救急活動に尽力していた人を襲おうとしていたところを魔物の胴体目掛け、撃つ。

そこには一切のためらいはない。

助けられた20歳後半くらいの青年は自分がいつの間にか襲われそうになっていたことと背後の魔物の撃ち抜かれた箇所を見てしばらく茫然としていたが自分がしなくてはいけないことを思い出したのか、命の恩人の少年の方向を向き一礼し、また仕事に帰って行った。

今の彼の最優先事項はこの護衛。

少年は少し緊張を解き、それまで周辺に放っていたとてつもない殺気を緩めたところに1人の白衣を着た医師が近寄ってきた。

「今宵くん！ここはもうじき終わる。君は患者の運搬を手伝ってくれっ！」

「分かったっ！！それでもまだ魔物はうろついているからできるだけ気をつけるよっ！！！！」

今宵と呼ばれた少年は踵を返し、一番近くにいた看護師に手を貸す。

榊原今宵。

これが彼の名前だった。

名前、といってもこれは本当の親がつけた名ではない。

あくまで今宵を拾った研究者がつけた名前だった。

最初は検体番号で呼ばれていた様だが、今宵が“有能”だと分かった途端、合格の印としてつけられたということだ。

つまりこの名前には親の愛情がこめられているわけではない。

まあ、研究所にも今宵を純粋な愛情持つて育ててくれた人もいたのだが、その人はもう死んでいる。

あれはいつのころだっただろうか・・・

だが、決してとても幼い頃だったことではないということだけは覚えていてる。

「おい！運搬終わったぞっ！！早く文月学園に運ぶんだっ！！」

医師の1人がここにいる全員に呼びかけた。

今宵も傍に停められていた車の助手席に飛び乗る。

この車は5人乗りのとても一般的な自動車で、それといって何かが秀でているとか、空を飛べるとか、そういうことはなく、ただ純粋

に普通の車だ。

しかし、1つだけ違うところがあった。

後ろの人が座るべきシート一面に弾薬が積まれていた。

なかにはショットガンやライフルまである。

今宵が助手席に乗って少ししてから、隣の運転席に身長175センチ程で、口の周りにそり残した髭の後がある、30歳半ばだと思われる警備員アンチスキルの男が入ってきた。

人によっては悪いイメージを持つかもしれない。

彼はまもなく車を発進させる。

男の名を水野誠介みずのせいすけといった。

ちなみにこの男が今宵をここの護衛を任せた張本人でもある。

「で、水野さん。どうするんですか？このままじゃ埒が明かないっすよ？」

今宵が水野に率直に言った。

これに水野は少しも考えもせずになんなことあたりまえだろ？と言わんばかりに今宵に言う。

「そりゃ・・・考えることじゃないだろう。片っぱしから助けるさ」

今宵は実はこの水野という男が眩しく見えた。
それは・・・

（アイツ、に似てるからなのか・・・？）

「でも、見知らぬ相手にいきなり銃を手渡して一緒に戦えはないじゃないですか？」

「人命が助かるのならいいのさ」

「それってこっちの人権、無視してません・・・？」

「ほら、グダグダ言っでねえでさっさと行こっぜ」

「あー・・・もう！！！！！」

自動車は文月学園へと走り出した。

n e x t
...

第7問 運命の交錯（後書き）

今回はオリキャラオンリーになりました。
次回からは上条さん達もちやんと登場しますよ〜

第8問 VS ファイアブロンク part1 (前書き)

テスト終わったぜっ！

第8問 VS ファイアブロンク part 1

今宵 said

「・・・で、今度はどこに向かつてるんですか？」

今宵が水野に少し呆れが入っている口調で訊ねた。
水野は自分の顎下を左人差し指で掻きながら言う。

「んー・・・文月学園」

「文月学園？」

「そう、文月学園さ」

文月学園といえば、現在の患者の収容施設になっているうちの1つ
なのだが、今宵には彼の決定に少し違和感を覚えた。

「それにしても少し意外ですねえ」

「ん？何がさ？」

「そりゃ、水野さんのことだからすぐに次の救出現場にでもいくの
かと思いましたよ」

今宵は今思っていたことを率直に伝えた。
それに対し、水野はそっけなく、

「助けたとしても、どこの病院も満杯じゃ収容できないでしょ？だ

から情報を集めに行くのさ」

とだけ答え、近くにあったガムを口に含んだ後、それっきり喋らなくなった。

明久 side

「――まず、私は人間ではない」

「え・・・？それってどういうこと・・・？」

「簡単なことだ。私はマクスウェルという“精霊”ということ。ただそれだけのことだ」

ミラはありえないことをスラスラと言う。

いつもだったら軽く笑って流すだけだと思うけど今は違う。

目の前にある非日常的^{リアル}光景を見て、そしてそれを身を持って体験したうえで、そのミラの話の軽く受け流すなんてことできるはずがなかった。

それを肯定するかのように、Fクラス+aのメンバーは真剣に話を聴いていた。

雄二も壁に寄り掛かってはいるけれどいつになく目が鋭い眼光を放っている。

こいつのここまで真剣な目を見たのは8月に起きたあの事件^{シスターズ}。妹達をあの死の運命から解き放った、あの時以来だと思う。

・・・あの時、そこに誰かがいた。僕と、雄二と、秀吉やムツリ
ー二と一緒に、戦ったはずだ。だけど、それは誰だったのだろう。
僕は知っていたはず。いや、本当はとも仲が良かったはずなのに。
それなのに、僕の頭の中にはその時、その人の記憶だけが綺麗さっ
ぱり抜け落ちていた。

「マクスウェルというのは2000年前、リーゼ・マクシアを想像
した精霊でございます」

ミラの言葉をローエンが引き継ぐ。

「リーゼ・マクシア？」

リクオ君が訊ねる。

「リーゼ・マクシアとは、人が精霊にマナを与え、精霊が人間に力
を与えることで、二つの存在が共存し合っているとても豊かな世界
のことです。もし、ここがそのリーゼ・マクシアとは別の世界だと
するならば、ここではマナや精霊術などの考えはないはず・・・
どうですか、明久さん？」

「えっ？あ、うん。僕が知る限りではそんな話聞いたことはないけ
ど・・・」

僕は自分の頭が記憶している全てを総動員させたけど、マナとか精
霊術、なんて言葉はヒットしなかった。

というか何だろう。

やっぱり僕の記憶には微妙に違和感を覚えてしまっ。

素っ頓狂なことを言っているというのは分かってるんだけど、僕が“本来知っていなくてはおかしいこと、絶対に忘れてはいけなさと”が抜け落ちて、他の記憶に塗り替えられているような気がする。

しかも、その違和感もつと強く感じたのが、ミラ達が僕の前に現れたその瞬間。

・・・一体どうなってるんだろう…？

「まあ、明久の記憶だけじゃ不安だろう『何！？』とりあえず、俺の知る限りでもそんな言葉、聞いたこともない」

雄二には後でいろいろとお仕置きが必要だな・・・

そうだ、この事件が解決したら雄二と霧島さんが同居してたってFF団にばらしてやろう。

「となると・・・」

「ここは私達がいたところとは全然違うところっていうこと・・・
・・・ですか？」

エリーゼちゃんが言う。

「だが、それ以外に可能性はないのだろう？ならば、今は戸惑っている場合ではない。ここがどういう場所なのか判明したのだから、行動を起こさなくてはな」

行動？と訊いたとした刹那。

(グアアアアアアアアアアアア！！！！！)

という地鳴りのような唸り声に隠されてしまった。

『！？』

どうやら声の主はクラスの窓のすぐ傍にいるらしく、全員がそっちを向く。

「え？」

そこにいたのは体全体に炎を纏っていてその体表は硬そうな岩に似た鎧のようなものでその下にあるはずの皮膚を隠された四足歩行で歩く恐竜のような生き物だった。

何というか・・・

浮いてるんですけど・・・？

というか、今すぐ炎弾撃つてきそうな構えしてるけど大丈夫・・・？

「こ、これは・・・ファイアブロンクですと・・・？あの魔物は溶岩地帯にしか存在しないはずでは・・・！？」

ローエンが驚きの声で言う。

つていうかとにかく・・・

「伏せて！！！」

僕は叫んだ。

「ッ！？」

僕の目の前で姫路さんと美波が何が起こっているのか理解ができていないというようにまだ、窓の近くでオロオロしている。

僕は自分の身の危険なんて忘れて彼女達のところまで出せる全ての力を総動員させ駆けた。

「アキっ!？」

「明久君!？」

今にも、あの炎の龍は炎弾を僕らのところまで撃つてきそうだ。

でも、それでも構わなかった。

今やらなきゃいけないことは早く姫路さん達に手を差し伸べることに
まあ、カメラを構えて目に留まらぬ速さでカメラのシャッターを切
っているムツツリー二には呆れたけど。

やっぱり、あいつは大物なのかな？

いやっ!そんなこと考えてる暇はないっ!!!

「明久!!伏せるのじゃ!!!!!」

どこかから秀吉の声が響いてきた。

窓の外ではもう、炎の龍はすでに炎弾をこちらに向けて放っていた。

僕は死を覚悟したうえで、姫路さんと美波の手を握り、床に伏せた。

・
・
・
？

・
・
・
・
・
・
？
？

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
何も起こらない
・
・
・
・
・
・
？
？
？

僕は体を起こす。

姫路さんと美波はまだ目を瞑って床に伏せていた。

「……………え？」

その時、僕の目に映ったのは。

ツンツン頭の少年が炎弾を右手一本で受け止めていたところだった。

n e x t
…

第8問 VS ファイアブロンク part1 (後書き)

上条達の合流・・・かな？

外伝 第3問 解決策

「はあ、はあ・・・」

Fクラス愚連隊の面々は炎の巨人に水蒸気の爆発をもろにくらわせ、その隙に1つ下の階の階段傍で体を休めていた。

「それにしても・・・あんなことが起こるなんて驚いたよ・・・」

明久が息を切らしながら言った。

ちなみに明久の能力は『アクアカレント水流制御』と言って『レベル3強能力者』。

その名の通り水の流れ、すなわち水流を操ることができる能力である。

もう1つ、秀吉の能力。

その能力は少し貴重なもので『スキルプラス能力補助』という。

それは、他人の能力を強化する、という超能力。『レベル4大能力者』。

他人の補助の具合というのは、簡単にいうとこんな感じ。

例えば『レベル1低能力者』なら、秀吉の補助によって『レベル3強能力者』程度に能力が一時的にアップする。

更に細かくすると、

『レベル2異能力者』 ↓ 『レベル3強能力者』と『レベル4大能力者』の間程度の能力』
『レベル3強能力者』 ↓ 『レベル4大能力者』
『レベル4大能力者』 ↓ 余り変化はない。
『レベル5超能力者』 ↓ 理論上では変化がないとされる。（補助するような面がないため）

この能力は学園都市では約150人の発現が報告されており、『空間^{テレ}移動^{ポート}』程ではないが希少な能力である。

これを先程の明久の能力に当てはめると、彼は『大能力者^{レベル4}』程の能力を使っていたことになり、あの爆発も納得というわけだ。

だが、この能力。

ほとんど研究が進んでいない。

まず、『能力補助^{スキルプラス}』の前提がおかしいのだ。

一般論、レベルはそう簡単に上がったりはしない。

もし、意図してレベルを上げるとなれば、脳の作りを変えたりしない限り不可能だ。

つまり、

『能力補助^{スキルプラス}』は脳に直接働きかけ、“何か”をしているのだ。

残念ながら、その“何か”現時点では解明されてはいない。

だが、もし“何か”を解き明かすことができるなら。

それが本当に能力に刺激を与えるものならば。

学園都市に『超能力者^{レベル5}』が溢れ返ることだろう。

努力なんて関係無い。

だって、“何か”を使えば何もせず、誰だって『超能力者^{レベル5}』になれるのだから。

そして、こんな魅力的なもの、学園都市の闇が見逃すはずがない。この能力を研究したいがままに、能力者を実験体^{モルモット}に使う輩のいるということ。

光あるところには必ず影がある。

幼いころから闇を知る今宵だからこそ分かる。

秀吉は必ず近いうちに学園都市の闇を知ることになる――
明久達も例外ではなく、秀吉の補佐を受け戦闘したことがあるというだけで闇に引きずり込まれることになるだろう。

まあ、今はまだ闇からの刺客は来ていない。
できればこのまま一生お出でになられたくはないが。

「あれ？　そういえばあいつまだ襲ってこないよ？」

今宵も周りを観察する。

そこにはいつもの寮が広がっているだけで、炎が踊っていたりはしていなかった。

ただ、壁や床、至る所に謎のお札（？）の様なものが散らばっていたが。

それにしてもよくこれだけの量をコピーしたものだ。

「予想通り、だな」

「？　どういうことじゃ、雄二」

坂本が腕を胸の前で組んで、しかも誇らしげな顔で言った。
そして策士は口を開く。
坂本雄二

「今、ここにいないのは誰だ？」

『！？』

明久、秀吉、坂本・・・

そうか、そういうことか。

『ムツツリーニッ！！』

この場にいる坂本を除く全員が声を揃えて叫んだ。
よく思い出してみるとさっきの場面。

ムツツリーニの気配を感じることは無く、声も聞いてはいなかった。

「ようやく気づいたか。そうだな、そろそろだろう」

坂本が呟いた瞬間――

（ザァッ――）

スプリングラーが一気に作動した。

「さあ、そろそろ終わりにしようぜ？」

今宵達は坂本を先頭として歩きだす。

（ガタンッ）

丁度、寮名物のオンボロエレベーターがこの階に到着した。
そこに乗っていたのは――

「悪いな、坂本。最後は俺がやる」

上条当麻とムツツリーニ。

Fクラス愚連隊は水に濡れた寮の廊下を歩く。

水で濡れたお札を背に

n e x t
:

外伝 第3問 解決策（後書き）

秀吉と明久の能力を明かしました。

一応この通りなんですが、矛盾点などがありましたらご指摘お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0760y/>

TALES OF QUARTET ～バカと科学と妖怪と～

2011年12月5日20時02分発行